

寺尾地区は市内の西端に位置し、中道町と接する場所にあります。寺尾という地名は、お寺の近くに位置することに由来し、その寺とは寺尾前付にあったとされる大祥寺と思われます。大祥寺は弘法大師が806年に開基したと伝えられ、暦応元（1338）年に中道町上曾根に移って竜華院となり、廃寺となりました。

この寺尾地区の北側の入口に当たるのが間門地区で、間門は馬門とも記され、中道往還を通して甲府から出発すると、上九一色へ抜ける最初の坂道だったことに由来するようです。この中道は、甲斐と駿河を結ぶ最短経路として弥生〜古墳時代前半には重要な街道でしたが、古代甲斐の中心が八代・御坂・一宮辺りに移るに従い、重要度が薄れたと言われています。しかし、中世以降甲府の町が栄えるとともに重要度が増し、武田氏は間門坂の入口辺りに、警護の士を置いたと伝えられています。

中道往還とほぼ並行する国道358号線（精進湖線）の間門の信号から、旧道を少し登ると、梵字石が残っています。梵字とは古代サ

訪 探 市 吹 笛

シリーズ 第10回

境川町寺尾地区



梵字石

ンスクリット文字（インド）のことであり、この石には阿弥陀と地藏を意味する文字が彫られています。

この梵字石は、『甲斐國史』によれば真言宗大祥寺の境界を示すとされており、大祥寺参道入口と考えられます。ここから大祥寺までの間に、

現在中寺尾地区にある諏訪南宮神社の前身があったと伝えられ、古代の集落（八代郡白井郷の一部？）が存在していたと考えられます。古代の遺跡が少ない境川地区においては、重要な地区と言えます。

ところで、前身の諏訪南宮神社は、治承年間（1177〜1181）に造営されたと記録にあり、地藏権現がこの神社の宮犬を連れて、出羽の国（今の山形県）で役人に化けて悪さをする古狸を退治したという伝説が残っています。武田氏滅亡後2つに分社され、その1つが現在の地に移ったと言われています。元亀元（1570）

年9月武蔵出兵に先立ち、武田信玄が納めた祈願状や、信玄の弟武田道遠軒信綱が描いたという扉絵が残っており、武田氏から厚い庇護があったことが窺えます。

また、上寺尾地区の桑原家に伝わる古文書に、永祿3（1560）年の武田晴信（後の信玄）の印判状があり、これにより当時の漆を集めた状況が窺える貴重な資料で、県の指定文化財になっています。

このように、地域には多くの歴史が残っており、それを後世に伝えていくことが重要だと考えています。

笛吹市教育委員会 社会教育課



諏訪南宮神社扉絵(表)